

【目的】乳幼児の心身の健全な発達を促し援助していくことは、社会にとって基本的に重要なことである。我が国で現在実施されている1才6ヶ月児健診は、精神発達上の最初のスクリーニングの意味合いがあり、要経過観察児の多くは境界線事例である。それゆえに、この時期に何らかの援助を行なう意義も大きい。本研究は、愛知県I市における経過観察児に対する事後指導としての「親子教室」を資料として、幼児期前期の発達指導について、その有効性と問題点について検討を行なうことを目的とする。

【方法】昭和59年9月の「親子教室」開設以来61年2月までの2年半（毎月1回で計30回）の間に参加した子ども44名とその保育者（多くの場合は母親）を対象として、初回参加以来「親子教室」参加回数を重ねるに伴う変化についての観察記録を資料として分析する。

【結果と考察】①1才6ヶ月児健診時の精神発達上の問題点は言語遅滞が多数を占める（参加事例の3/4）。保育者の多くに共通していることは、子どもの発達についての無知であり、それは子どもの心情を共にわかち合う感性の欠如をもたらす。②子どもと保育者(母)の経時的変化の分析から「親子教室」での親子遊びと発達指導は、保育者に対して子どもの発達のみならず子どもの発達についての認識を導き、子どもに対する観察眼を養い「この子」独自の発達を受けとめる目を持つことに寄与したと思われる。③今日の問題として④保育についての学習機会の希薄さと、⑤「母親」「母性」のみの強調は「母親であることへの不安」を助長し「子育ては難しいもの」の思いを強めさせて、援助としては十分ではなく、もっと子どもと共に楽しむことの指導とその実際的な場を提供することの重要性、が指摘できるのではないか。